



文字にのせる 旅の余韻

今日もJALグループの翼をお選びいただき、ありがとうございます。夏の厳しい暑さも和らぎ、機内の窓から見下ろす山々に秋の深まりを感じていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。空の上で出合う景色の移ろいは、地上では感じるることのできないダイナミックスが醍醐味かもしれません。

ところで、以前は機体に赤い「〒」のマークが描かれていたのをご存じでしょうか。今から約100年前の10月、日本で初めて航空機による郵便物の輸送が始まりました。お客さまのお荷物や貨物と共に、今も多くの手紙やはがきを載せて、多い路線では1日1t以上の郵便物が日々空を旅しています。手紙やはがきに込められた皆さまの「大切な想い」を世界へ届けるこの役割は、今でも変

わることのない私たちの誇りです。はがきといえば、私にはある変わった(?)習慣がありました。それは、海外の街を訪れた際、滞在先から「自分宛て」にはがきを送ることです。その土地の空気、人や建物、見聞したものに触れて感じた想いを、そのまま文字にのせてポストへ。帰国後、いつもの暮らしに戻った中でそのはがきを読むと、異国の薫りと共に旅先での新鮮な感動が鮮やかによみがえるのです。日常の中で受け取るその「旅の余韻」は、当時の私にとって、ひそかな楽しみでした。デジタル技術の進歩は、いつでも誰かと「つながる」手軽さや迅速さをもたらししてくれます。空の上での「二期一会の風景や想い」を、他の誰かとリアルタイムで「シェア」しながら過ごされている方も多くいらっしゃると思います。そうした便利で楽し

いデジタルの世界の隙間で、時間をかけてつづる手紙やはがきには、思いもよらない特別な温もりが宿るように思います。書き損じたときには、つい声を上げながらも新しく便箋を広げて、また一から。それでも相手を想い、ペンを走らせる時間そのものが、心にそっと届く、温かい贈り物なのかもしれません。

皆さまも、空の旅の途中、あるいは目的地に到着された際に、大切な方や、未来のご自身に宛てて、久しぶりにペンをとってみてはいかがでしょう。時間をかけて届けられる文字に、デジタルとはまた異なる旅のいろどりが加わるかもしれません。皆さまのこれからの旅路が、心温まるすてきな思い出となりますように。

次回のご搭乗も心よりお待ちしております。

イラスト／山本祐希子

とっとりみつこ／1964年、福岡県久留米市生まれ。1986年4月入社(客室乗務員)。2019年に客室安全推進部長、2020年に執行役員 客室本部長、2022年に常務執行役員 客室本部長、2023年に専務執行役員 カスタマー・エクスペリエンス本部長に就任。同年6月に代表取締役専務執行役員、グループCEOに就任し、翌2024年4月から現職。趣味は音楽鑑賞と大河ドラマを見ること。

